

【『自分事』にしてもらうために】

釘子明氏は、全国各地に招かれて講演も行っている。聴衆について、こう教えてくれた。

「災害の危険性が喧伝される地域や、比較的近い時期に災害を経験した地域で講演するときは、みなさん真剣に聴いてくださいます。一方、しばらく災害が発生していない地域などでは、みなさんをひきつけるための工夫が必要です。」

本来は「企業秘密」かもしれないが、その工夫の一端を教えてもらった。ひとつは、豊富な画像を見せながら語ることで、疑似的に震災を体験してもらうことだという。この点は伝承館にも共通するところがある。東日本大震災津波と過去の津波災害を比べて大きな違いのひとつが、津波が映像として残っていることだ。その映像をご覧いただくため、沿岸12市町村の津波の映像をご覧いただくシアターを設置している。

もうひとつの工夫は、子や孫に思いを馳せてもらうことだ。「ここにいるみなさんは、もしかしたら幸いにも災害を経験することなく一生を終えるかもしれない。でも、みなさんの子どもや孫の代まで考えれば、必ず誰かが災害を経験することになる。」こう話すと、聴衆の目の色が変わるようだ。災害に対する「備え」を自分には不要だと思っている人でも、子や孫のためと言われれば「不要」と言い切れなくなる。ひとは「自分のため」より「愛する家族や子孫のため」の方が真剣に考えられるということかもしれない。



東日本大震災の写真展開催！と、講演活動